

「広域化の取組経過と成果・課題」

- 短期的展望…「自立・直営」
- 中期的展望…「周辺四事業体との連携」
- 長期的展望…「県内一水道」

佐賀東部水道企業団
企業長 柳川 和政

報告の前に

前提①

- 都市部や本日同席の北奥羽、岩手中部のように事業体や首長、県の主導で動いている所は別。
- 地方で広域化の議論が具体的に進展していない事業体としての意見。

前提②

- 現状（表面的）では水道事業は「何の問題もないように見える」のが問題。
- 大きな課題は、中・長期（20～50年）の更新の財源確保。
- 財政計画（9か年）では現れず、ある時期に一気に噴出。
- その時は手遅れの状態で出現。

当初の広域化の経緯

- 昭和47年7月 佐賀県側に日量104,000m³の配分水量決定
- 15市町村で広域水道設立準備委員会を組織し、広域水道企業団を目指す

当時の状況

- 佐賀市、鳥栖市以外の水道は脆弱かつ零細な状況
- 簡易水道、専用水道が主体であり、市町村単位での管網整備は財政的に不可能
- 県営か企業団営か事業主体決定に紆余曲折の末、企業団による水道事業

広域水道企業団のスタート

- 昭和50年4月 13市町村で用水供給事業の佐賀東部水道企業団が発足
- 昭和56年1月 水道未整備の7町村の統合を図り末端広域水道事業の認可
- 国、県の高度な判断のおかげで国庫補助事業により整備事業の実現

最近の広域化とは、状況・環境・内容に大きな違い

用水供給及び水道の二つの事業経営は佐賀東部の貴重な財産

将来・企業団はどうなる

今まで

- 危機感はあるが、まだ先のこと
- 方針議論は幹部の仕事→職員は真面目だが指示待ち体質
- 日常業務で精一杯、言い訳だらけ



ターニングポイント

きっかけ

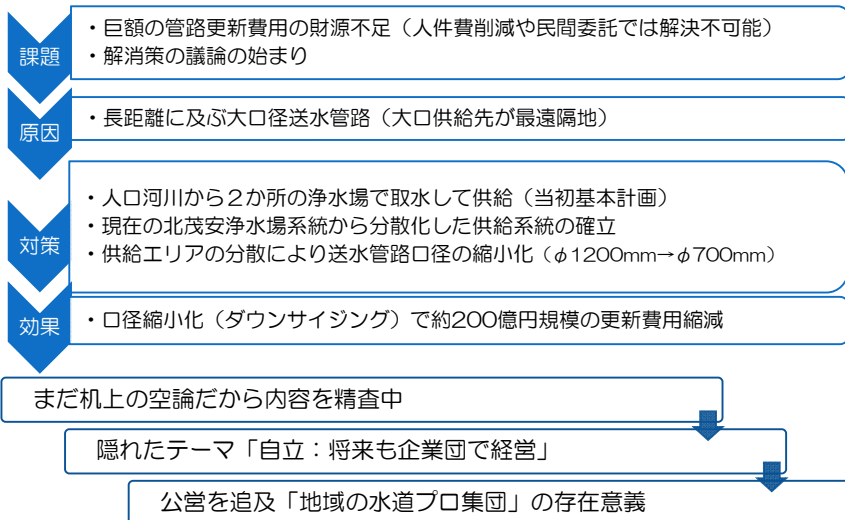
- プロパー職員ならば「水道は飯のタネ」
- 「50年先の経営は大丈夫か」職員全員で確認し合う作業
- 20年後までは大丈夫
- 30年後には末端水道で赤字の累積が
- 50年後には屋台骨を揺るがす事態が想定された



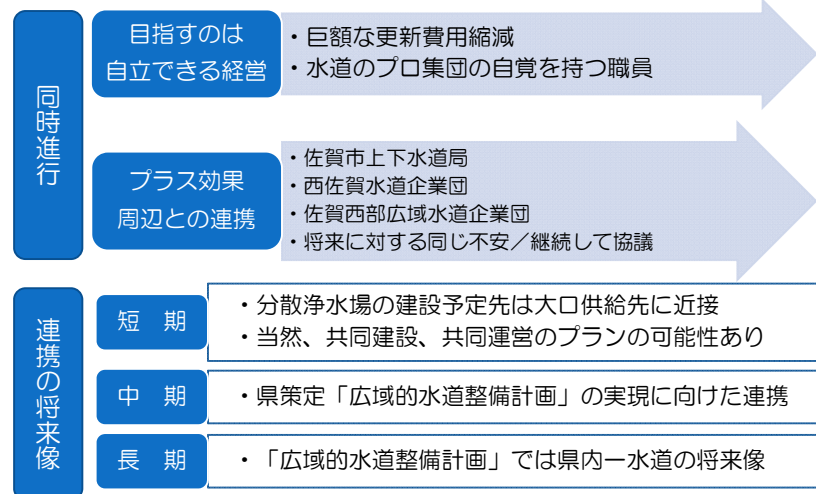
現在

- 「若い職員を路頭に迷わすことがない企業団に」
- 「企業団職員として退職金を受け取る」
- 危機感満載・やる気十分

どうする・解決へのシナリオは



「まず自立を目指す」・「連携」はプラス効果



議論の整理

①「大変だ・心配だ」から一歩前に

- ・将来の水道への危機感・あるようでない
- ・数字で経営状況の確認
- ・確認→自覚→展開へ
- ・これが第一のポイント

②課題は財源不足

- ・山積みの課題の本質は「大きな財源不足」
- ・人件費等削減や料金値上げのレベルじゃない
- ・主要幹線のダウンサイジング

③供給系統と浄水場の分散

- ・まだ机上の空論
- ・現在シナリオ点検中

議論の整理

④本当のテーマは「自立」

- ・わたしたちは「水道」が「飯の種」
- ・「地域の水道のプロ集団の存在価値」

⑤「連携協議」はプラス効果

- ・将来の事業経営は厳しい
- ・「困った」の連携・合併は危ない（余力があるうちに）
- ・まず「自立」を目指す

⑥将来の展望

- ・県内一水道構想の実現
- ・「水道のみ」の一部事務組合としての限界
- ・水道の受託先としての企業団

私の見解

- ①
 - 佐賀東部を取り巻く環境は厳しく、課題は財源や人材と承知
 - 課題の結論は「経営陣が考えること」「厳しい状況はまだ先」にすり替わり
 - 職員が少し逃げている
 - 今の時点で「やること、やれること」はあるはず。・・・将来の経営状況予測
- ②
 - 「自立策の議論」なくして連携・共同・合併は難しい
 - 主役は「プロの水道職員」・・・企業長や首長ではない
 - 「困った困った、難しい」の議論ではなく、具体的な議論が必要
- ③
 - 水道のプロの存在が、必ず地域には必要になる
 - その希少価値を食い扶持に生きていく
- ④
 - まず将来の経営状況を試算する
 - 国の試算「更新に130年」←大丈夫なはずがない結果
 - 解決策を模索し、公表（送水管路のダウンサイジング）
 - 短期的には「自立・直営」を目指す
 - プラス効果の「連携」（直近の浄水場の更新の時）
 - 長期的には「佐賀県内一水道」を目指す

